

清遂に準
噶爾と和
す

副將とし、同時に北路の副將軍查納弼に命じ、内蒙古の游牧地を衛らしむ。同九年傳爾丹進んで科布多コブトに城く。策零謀て大に清軍を敗り、副將軍巴賽、同查納弼戰死す。世宗、傳爾丹を振武將軍に下し、順承郡王錫保を擢で、靖邊將軍に任ず。

同十二年千七百三十四年準噶爾和を乞ふ。清廷其の可否を議するや、莊親王允祿、及策凌、查郎阿の兩將軍は、討伐せんと云ひ、大學士張廷玉は綏撫せんと主張し、議遂に遠征を罷むるに決す。是に於て侍郎傳鼎並に學士阿克敦、準噶爾に赴き、北路は城を鄂爾坤河に城き、戍兵を留めて屯田防禦せしめ、西路は哈密、巴里坤に戍せしむ。而して阿爾泰山を境と爲し、準噶爾の游牧は、同山より東に到るを得ず、喀爾喀の游牧も亦、之より西に到るを得ずと約せり。次で乾隆四年千七百三十九年準噶爾の通市を許し、又西藏に入りて、煎茶頂佛することも許せしが、之には豫め人馬の數を限り、始めて西北兩路の兵を罷むるに至れり。

乾隆十年千七百四十五年噶爾丹策零死し、嗣子那木札爾ナムチャル、殘忍殺戮を擅にし、爲めに近臣の殺す所となり、繼襲の争鬩絶ゆる間なく、諸部大に亂る。是に於て策妄那布坦の外孫、阿睦爾撒納アムルサナ、策零の孫、達凡齊タフチを擁して自立せんと計りたるも、其事成らず。同